

第1回科学技術会議での意見とWG取りまとめ(案)の対応一覧

委員名	第1回科学技術会議でのご意見	答申案での対応
平野委員	<ul style="list-style-type: none"> 兵庫県では、知的創造拠点というのがよく整備されているし、国家基幹技術の2つが動き出せば、まさに世界に冠たる知的創造拠点ができる。これから県として何を重点に置くかとなると、やはり知の利活用に努力をしていくことがいいのではないかと。 優れた研究者の下で、ソフトな連携を中心にやっていこうという動きが出ているので、そうした研究組織のあり方等を考える必要がある。 	P8 新規分野を開拓する『拠点連携型』 <ul style="list-style-type: none"> 2大知的拠点の連携 神戸ポートアイランド地区に新たな先端融合研究拠点を形成 関西のバイオメディカルクラスターを核として、国際医療産業拠点を形成
藤嶋委員	<ul style="list-style-type: none"> 新産業の創造や研究開発の推進という観点の他、県民が利益を感じられるような施策を盛り込むと、県民に身近に感じてもらえるのではないかと。科学技術や産業だけでなく、県の厚生労働部門の方にも議論に関与いただけると、意義のあるものができるのではないかと。 	P8 新規分野を開拓する『拠点連携型』 P5 漸進的に取り組む『改善蓄積型』 産業界が従来から行っている製品や生産工程の改良等に研究基盤が保有する材料技術等を活用し、既存技術を高度化する取り組み。
山口委員	<ul style="list-style-type: none"> 兵庫県は、ものづくり産業の比率が全国比率よりも高く、ものづくり立県だと自負してきたが、先端産業は必ずしも多くない。新産業の創出は非常に難しく、時間のかかることだが、むしろ県内の既存産業を強化するのに新しい技術が使われることが現実的であり、役に立つのではないかと。 	P6 革新的な産業技術力を創出する『革新技術駆動型』 研究基盤が保有している先端技術を技術移転することにより、革新的な産業技術力を創出させる取り組み。 P5 漸進的に取り組む『改善蓄積型』
堤委員	<ul style="list-style-type: none"> 最近、中長期的な研究開発を民間企業独自で行うことが難しい状況にある。研究機関の研究成果を産業に結びつける取り組みの構築等ができればと思う。自由に研究機関を訪れて、いろんな議論ができれば良いと思う。お互いに目標を共有し、研究施設や装置を使っていく仕組みが必要。 科学技術を志す若い人がいないということで、昔みたいに自由な発想で新しいことを考える人が減ってきている。兵庫県にはいろいろな設備、組織があるので、若い人が科学技術に興味を持てるような仕組みができると良い。 	P5 漸進的に取り組む『改善蓄積型』 P6 革新的な産業技術力を創出する『革新技術駆動型』 P11 若手研究者の人材育成 研究者が意欲と能力を発揮できるような支援やレベルの高い拠点の充実を目指す取り組み。 研究基盤の集積を活用した情報発信・理解増進 住民向けの情報発信や理解増進活動を重層的に推進し、科学技術に対する正しい理解や興味を持たせる取り組み。
北村委員	<ul style="list-style-type: none"> 地域の産業を興すには、文部科学省の科学技術政策だけでなく、経済産業省、農林水産省、国土交通省等の情報も踏まえて議論する必要がある。 	P8 新規分野を開拓する『拠点連携型』

委員名	第1回科学技術会議でのご意見	答申案での対応	
野上委員	<ul style="list-style-type: none"> これまで国は大学に基礎研究のための安定的な資金を提供していたが、それが次第に縮小され、競争的な資金を獲得できないと研究が遂行できなくなっている。 関西には多くの優れた大学があり、これらの知の集積を生かして、兵庫としての特性を更に強化しながら進めることが必要だと考える。とりわけ、兵庫県下に集結している優れた研究施設がより高いレベルで国内外の研究者に活用されることが重要だと考える。 	P11	若手研究者の人材育成
高橋委員	<ul style="list-style-type: none"> (臨床)現場のニーズと基礎研究を合体させることが必要だと思う。 医療のリテラシーを上げるためには、小中学校の教育に医学を入れるといいのではないか。 	P5	漸進的に取り組む『改善蓄積型』
杉本委員	<ul style="list-style-type: none"> 民間企業では中長期的な研究開発を考えるのが難しい、だからそういうことをワーキンググループで考えたらどうか。 科学技術の専門家を育てることも非常に重要だが、ファンを作らないといけな 県内だけで考えるのではなく、もう少し広い意味での連携もバックグラウンドに入れながら検討していけたらと思う。 	P6	革新的な産業技術力を創出する『革新技術駆動型』
神本委員	<ul style="list-style-type: none"> 「産業利用」を考えるときに、どのような産業であるべきかという理念が必要ではないか。 ネットワークのような広がりがあった上で、人の交流や親密な連携が必要。その際、兵庫県では非常に素晴らしい大型研究施設があり、それらが求心力になって、産学官連携が非常にやりやすくなるのではないか。 研究所と企業が組むと、個々のテーマで産業化に行きやすい。研究所と大学と企業が一緒になって3者でやると産業化が非常にうまく進むのではないか。 広報の場合、素材をつくるだけではなく、どういう人がどのような説明をするかが大事。コーディネーターも人がいないと言われているが、研究以外の部分でも、人材育成は非常に大事になるのではないか。 	P6	革新的な産業技術力を創出する『革新技術駆動型』
千川委員	<ul style="list-style-type: none"> 研究する技術が将来の基盤技術になっていくのかという見通しを持たないといけない。それを地域、産業界に啓蒙していくことも考えなければならない。 	P6	革新的な産業技術力を創出する『革新技術駆動型』
		P11	研究基盤の集積を活用した情報発信・理解増進

委員名	第1回科学技術会議でのご意見	答申案での対応	
藤田委員	<ul style="list-style-type: none"> 1つは、情報発信をどうするか。一番やわらかい子供のときに、この感性を育てることが重要。 兵庫県は施設や実力から見て、世界でトップクラスのことをやろうとしている。世界の兵庫という観点でうまく開示をして伸ばしていくこと。 	P11	研究基盤の集積を活用した情報発信・理解増進
		P8	新規分野を開拓する『拠点連携型』
桃木委員	<ul style="list-style-type: none"> 科学技術の理解増進、研究成果の発信活動を行なうときには、目的を明確にして、それに沿った計画を立て、実行すると、いっそう効果が上がるのではないかと。もう少し参加者が自分で考えて何かをすることを促すような、理解増進活動を試みてはどうか。高校生くらいを対象にする場合は、あるテーマについて専門家と議論するような形も効果的である。 	P11	研究基盤の集積を活用した情報発信・理解増進
原口委員	<ul style="list-style-type: none"> サイエンス映像を使った教育サービス産業振興協議会を兵庫県が立ち上げ、日中韓でつくり、それを中東、アブダビ等にも紹介をしていこうとしている。これはナノテクやバイオ等、いろんな技術が基盤にないといけないが、兵庫県ではそろっているのだから、こうしたものを使った新しい教育サービス産業みたいなものを世界に向けてという話も考えている。 理科系が得意でない先生が、数学や理科を教えるのに無理があると思う。兵庫県としては、例えば小学校高学年になると、方針で理科教育を進めるとか、そういったことをやっていけばもっとすばらしくなっていくのではないかと。 	P11	研究基盤の集積を活用した情報発信・理解増進
		学校教育に関する内容は、今回の答申案には入れない。	
本庄委員	<ul style="list-style-type: none"> 企業との共同研究が必要になってくる。企業と県内の研究機関との結びつきを県としてどのように施策面でサポートしていくかという視点が重要。県内の企業だけでなく、関西や外国の研究機関との共同研究の橋渡しなどをやっていただきたい。 	P5	漸進的に取り組む『改善蓄積型』
		P6	革新的な産業技術力を創出する『革新技術馭動型』
		P8	新規分野を開拓する『拠点連携型』
系賀委員	<ul style="list-style-type: none"> 理科も得意な先生、よく教育できる先生が担当すべき。 先端技術に関しては、中小企業とはなかなか結びつかない。いきなり頂点の技術を使ってビジネスをやろうというような題材が多く転がってるわけじゃない。先端技術でビジネスをやろうという人が中心になってまずは利用して、それがだんだん広がっていくのではないかと。 	学校教育に関する内容は、今回の答申案には入れない。	
		P5	漸進的に取り組む『改善蓄積型』
		P6	革新的な産業技術力を創出する『革新技術馭動型』
鈴木委員	<ul style="list-style-type: none"> 研究基盤の活用・連携というときには、企業トップの連絡会議や懇話会のようなものが上にあつた方がいいんじゃないかと。 	P6	革新的な産業技術力を創出する『革新技術馭動型』
藤浪委員	<ul style="list-style-type: none"> 大学との共同研究においても、大学側に資金調達の意識が強すぎるためか、なかなか中小企業が欲しい知恵がいただけない。 SPring-8 や次世代スパコン等の先端的な研究機関については、中小企業に対し、もう少し翻訳をするようなシステムがあれば、もっと近くなれるのではないかと。 	P5	漸進的に取り組む『改善蓄積型』
		P6	革新的な産業技術力を創出する『革新技術馭動型』

